

LEADERSHIP CHALLENGE

大隈塾LCレポートvol.02

第2回大隈塾リーダーシップ・チャレンジはGW最後の5月5日（土）6日（日）、田植えと講義（第4講）を行いました。今回の目的は、

- ①チームビルド
- ②五感を取り戻す（特に足の裏と手の指先の感覚、嗅覚、聴覚、味覚）
- ③食に関して考え、自分が食べるものを自分で作ってみる（「食料自給力」をつける）
- ④ライフスタイルを見直してみる
- ⑤身体を動かす
- ⑥大学生たちとの交流（早稲田大学の大隈塾生たち10人が参加しました）
- ⑦意識的にのんびりしてみる
- ⑧リベラルアーツについて考えてみる

にありました。また、大隈塾の4つの特徴である

「ソーシャル・ネットワーク」「哲学、信念、世界観」「リーダーシップ」「心技体」のうちの、「心技体」にもあたります。

職場での知識と経験の量に反比例して、体力と五感が衰えてきます。自然の中で、水と土と空気にふれながら、もともと備わっている感覚を取り戻すきっかけとなったかと思います。

また、講義は「21世紀的ライフスタイル&インテリジェンス」というテーマでした。二拠点生活も実践者が増え、働き方改革が時短ではなく生産性向上へとシフトしていき、AIの活用が進み、10年後（45歳ごろ）、20年後（55歳ごろ）のライフスタイルは今の延長線上にあるのか。インテリジェンスとは何か、仕事とどう活かしていくのかなど、左脳（論理性）と右脳（想像力、直感力）を交互に刺激する内容となりました。

5月5日（土）

ワークショップ：山登り

テーマ：身体を動かす、五感を取り戻す

10:30に東京駅八重洲口を専用バスで出発。アクアライン経由でお昼ごろには鴨川自然王国に着き、ご飯を食べて田植え.....というのが例年でしたが、今年は首都高の羽田空港付近で大渋滞。横浜方面の車線はやがて動き出しても、アクアラインへの車線はますます動かなくなる。ということで、木更津を抜けることにはすでに12時を回り、車内でお弁当を食べ、自然王国に着いたのは14時を超えているという、予想外の事態に。これを「予想外」としたのが事務局のリスクマネジメントの甘さで、受講生のみなさまには大変ご迷惑をおかけいたしました。申し訳ございませんでした。

先に到着していた早稲田大学の大隈塾の学生たちは田植えを、リーダーシップ・チャレンジのみなさんは、通称「がんこ山」に山登りに行きました。

散策も兼ねてたんぼ道をゆっくりと歩いて王国に戻ったころには16時近くなり、バーベキューの準備をしながら夕飯をスタートしたのは、まだ17時。コンテンツの目的のひとつ「意識的にのんびりする」ではありますが、通達したわけでもないのに、ほぼ全員がスマホを起動させないというのは「意識的にのんびりする」実践として見事でした。

日没と同時に気温も落ち始めたので、焚き火を囲んで丸太の椅子に座り、お酒を楽しく飲みながら王国産の野菜や肉を焼いて食べました。



5月6日（日）

ワークショップ：田植え

テーマ：身体を動かす、五感を取り戻す

6時起床。6時30分から田植えを始め、8時でいったん休憩兼朝食。用意していただいたおにぎりを1個2個3個と食べ、お味噌汁を1杯2杯と飲んで、たんぼに戻ります。そしてなんと、9時30分には棚田2枚の作業終了。作業面積は棚田2枚で1反5畝、およそ1500平方メートル。成果予定は9俵=540kgのコメになります。1人あたりのコメの年間消費量は約60kgですから、9人分にあたります。

【受講生のレポートより】

世の中は非常に便利になり、マスメディアだけではなく、身近にデジタルデバイス、またAR/VRなどの技術の進化により疑似体験が可能な時代になっている。疑似体験は非常にリアルに見えるが、他方で本来人間の機能として備わっている機能を駆使せずとも、色々なことを知ることができた気になる。

実際に田植えをすると、不安定な足元、浅い水田を泳ぐオタマジャクシやザリガニ、色々な匂い、風など、現実の感覚を通じ、泥をつけながら動くことで、一つだけではなく全ての感覚を使っていることでより広く、自分が持っている感覚から直接、視覚・聴覚・触覚・嗅覚・（味覚）で自然を感じることができる。高野先生の講義でも語られていたが、こういった感覚を使うことによってより深く物事を感じることをできることにつながり、自分の感覚を研ぎ澄ます機会になるのではないかと実感をした。

田んぼが正方形ではないので、均等の間隔で田植えをしていこうとすると、作業を進めていくうちに隣の人との間隔が変わる。泥の中で田んぼを見ながら作業をしていると、一見気づくことができないため、周りを見ながら、声をかけながら、チームワークで作業することが求められる。

また、人によりペースも異なるため、前進するタイミングもチームで進めることが必要となる。

=====
全身のセンサーである足の裏で感じた土（泥）の感触・温度や、田んぼの自然の匂いは心地よくて、短時間だったためかもしれませんが、早朝の腰をかがめた活動であるにも関わらず、決して疲れたという感覚は無く、むしろ体がイキイキしてくる感覚がした。この感覚は見る・聴くだけではわからないし、五感の中で普段あまり生かしていない感覚で感じると、引き出しやすい記憶につながることに気づかされた。

田植は活発なコミュニケーションを生み出す体験であるとも感じ、職場のチームでやるのもいいと思ったし、自分の子どもたちにも是非やらせたいと思える体験だった。

=====
まさに「非日常」を感じた2日間だった。時間になると、鴨川自然大国には12時間もいなかったが、まるで1週間くらい滞在していたかのような濃密な時間であった。イベント満載で、そのどれも刺激的だった。「意識的にのんびりする」機会でもあったが、それ以上の刺激の多さが、個人的な感想である。

=====
大人数だったので、食事の支度を皆でもっとお手伝いできて良かったのではないかとも思いました。

=====
私自身がまず反省すべき点ですが、「お客様意識」になっている事。お願いや指示された事には準備、片付け等動くのですが、自分たちで自主的に手伝い、行動するという点においてはできてない点は多いです。

確かに「のんびり過ごす」は一つのテーマではありますが、自分達で作る研修でもあると自覚し行動しなければならないと感じました。

=====
王国の風景や山の頂上からの景色を見て、土や木、田んぼの生き物に触れ、風の音や鶯の鳴き声を聴き、土や焚き木のおい嗅ぎ、そして王国や王国の近くで採れたてのものを味わう。当たり前の行動ですが、意識して感じようと思わないと、刺激となって脳に伝わっていないような感覚を持ちました。今回一番刺激されたのは、触覚だと考えます。普段の生活の中で、五感が鈍ってしまっているという事を痛感しました。

=====
業務の中では日常的に協力したりされたりすることがあるが、メール等の無機質なものが多く、声を掛け合って目標に向かって一歩ずつ進んでいくことは楽しかった。田植えが完了したときは、一体感、達成感を味わえた。

=====
この田植え以来、車窓から見える田んぼを見る目が少し変わった気がする。

農業、食物自給率。全ては自分の中の意識付け。

今、この時に、この体験が出来た事を幸せに思う。



人生初の田植えで、鳥や蛙の音が響く快晴の中、田んぼに足を入れた際の感覚や、苗を植えたときの手の感触、土や苗のにおい、実際にやってみなければ分からない感覚を得ることが出来たことは、非常に大きな経験であり、五感が大いに刺激された。普段、何気なく食べている米を自らの手で作る体験は、当然、頭ではその有難みを理解していたものの、一つ一つ苗を植え、地道な作業を行うことでより実感することが出来た。

今回は、「意識的にゆっくりしてみる」ということが一つのテーマであったが、時間を気にして、やはり何かをしなくてはという衝動が常にあった。ただ、心と体をリセットし、新たな発想・行動に繋がるのではないかと思えるので、今後また取り組んでみたい。

月曜日はもっと疲労を感じて思っていたが、体の疲労感よりも頭がすっきりとしている感覚を持ちながら出社した。「ただただ自然を眺める」「日常では味わえない五感を働かせる」ということが脳内疲労を解消し、体も回復させたと思う。「休息＝体を休ませる」ということを意識していたが、脳を活性化させることも意識して取り入れていきたい。

学生は、1年生から就活生までおり、選抜をされていることが強い理由と思うが、自主的に動き、一人ひとりがオーナーシップを持つようとしている気持ちを感じ、また知ることに対する欲を感じた。知ることに対する欲は、結果を出すためにどういったアウトプットをしていく必要があるかに重きを置く社会人とは異なり、純粹に知ること・興味を持つことの初々しさを感じるとともに、そういったアプローチからも新しい価値のある何か生まれるのではないかと感じる。

社会人になると学生との交流は極端に少ない。あるとすれば就活生への会社紹介、採用面接ぐらいにてプライベートで長時間に渡り彼らの本音を聞けるのは貴重な時間だと思う。又、世の中の大人（特に中堅社員以上）は学生に対して偏った固定概念（所謂、今時の若者は～的な考え）がまだ残っている部分もあると思うのでこのような機会は我々にとっても有意義。

そして、10時から高野孟さん（ジャーナリスト）の講義。田植え作業のすぐあとに、「インテリジェンスとはなにか」という振れ幅が大きな展開となります。

第4講

講師：高野孟さん（ジャーナリスト）

テーマ：「21世紀的ライフスタイル&インテリジェンス」

私は、早稲田で2013年度まで担当していた高野ゼミ「インテリジェンスの技法」で、いくつかの大事なことを講じてきた。

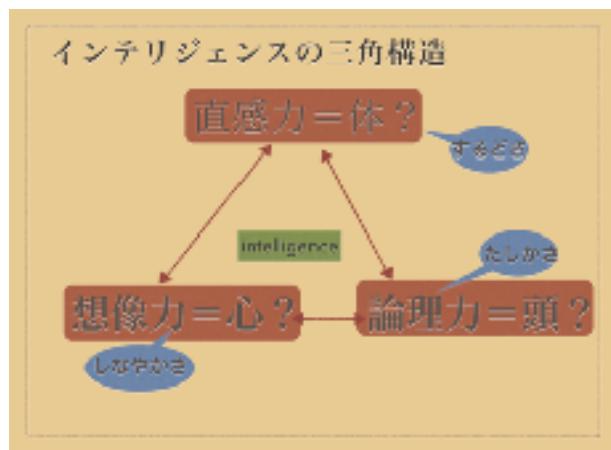
第1は、インテリジェンスとインフォメーションの区別と統一。広辞苑でインテリジェンスを引くと「(1) 知能、知性、理知。(2) 情報。」となる。インフォメーションを引くと「(1) 情報、報道。(2) 受付、案内所。」と出る。

ここでどちらにも「情報」という訳語が出てくることが問題で、つまり、日本語ではインテリジェンスとインフォメーションの区別がつきにくい。ところが英語ではその区別は厳然としていて、例えば駅やデパートの「案内所」をインテリジェントと呼ぶことは出来ないし、米CIAをセントラル・インフォメーション・エージェンシーと呼ぶことはあり得ない。

ところがこの両者が別物で、まったく接点がないのかということそんなことはなくて、インフォメーションは「第1次情報」、すなわちすでに起きた出来事についての事実情報であるのに対して、インテリジェンスは「第2次情報」。それらのインフォメーションを出来るだけたくさん集めてそれをいろいろな手法を駆使して解析し、この背景にはもしかしたらこういう時代変化が潜んでいるのではないかなどと仮説を立ててそれを検証し、物事の本質に迫っていかうとする姿勢である。

●三角形のグルグル回り

このインテリジェンスをどう鍛えていくかという時に、私が提示してきたのは「インテリジェンスの三角形」というもので、これは「直感力=体? =するどさ」と「想像力=心? =しなやかさ」と「論理力=頭? =たしかさ」で、これが右回りでも左回りでもグルグル回ることが上手なのが「インテリ」である。



今時の若い皆さんは、それなりの論理力は鍛えられていると思う。これを「論理力」と言うのは誉めすぎで、率直には「屁理屈は立つ」ということである。屁理屈をこねる能力はそこそこ鍛えられているとして、それだけでは世の中、通用しない。

1つには想像力を鍛えるということ、それを私は、かつてのゼミでは「地理的=空間的」と「歴史的=時間的」な「ワーブ能力」ということを、いくつかの具体的事例を示して練習して貰った。

いま1つだけ端的な例を挙げると、日本列島というのは物理的=地理的に見て長さ3000キロ。南の台湾に近い与那国島から鹿児島の大隅半島の先までが1000キロで、これは歴史的には「琉球」なのだ薩摩から福島までが1000キロで、これは「大和」。そこから北方領土の北西限までがまた1000キロで、これは「蝦夷」。で、皆さんが「日本史」として教えられてきた日本歴史は、実は大和史でしかない。蝦夷も琉球も明治早々に最終的に大和に屈服させられて、それから大和中心史観が横行するのだけれども、そのために皆さんを含め多くのヤマトンチューは沖縄が基地の問題であれほど苦しめられていてもほとんど関心を持たない、アイヌの人たちが何を訴えても耳を傾けない。皆さん、知らず知らずに「大和」イデオロギーの囚われ人になっているということだ。

とすると、まずは琉球、大和、蝦夷を全く対等な、物理的に1000キロずつの領域を分かち持つ歴史主体として認め、その相互作用としての日本列島史として自分の中で再構築しないと、日本とは何であるかが分からないということになる。

もう1つ、これが一番難しいのが、直感力を鍛えることである。しかも都会人には特にこの劣化が著しい。

五感とは、視る、聴く、嗅ぐ、味わう、触れるであるけれども、その五感がバランス良く働かなければ、その先にある「第六感」などあるわけがない。第六感は、「五感のほかにあるとされる感覚で鋭く物事の本質をつかむ心の働き」（広辞苑）である。

これを鍛え直すには、ともかくも「本物に直に接する」こと、「疑似代用品で済ませることを可能な限り回避する」ことではないか。

例えば、ロック音楽が大好きという人がいて、電車の中でも道を歩いている、イヤフォンでCDを聴いている。しかしその時に彼が使っているのは聴覚だけである。ロック（に限らず音楽）を楽しむというのはナマが本来で、ステージの間近にいれば、まず音自体も終わってしばらく難聴が治らないほどの激しさであるし。ステージには様々なライトが飛び交って目も鋭い

刺激に晒されるし、歌手の唾や汗も飛んでくるし、興奮した聴衆が立ち上がって足踏みしたり踊ったりする振動も伝わってくる。それらすべてを全身で感じるのが「ロックを楽しむ」ということであって、CDをイヤフォンで聴くというのは代用品でしかない。

もちろん、毎日のようにロック・コンサートに行く訳にはいかないから、CDを聴くのはいいのだけれども、それは代償行為でしかないことを意識しておく必要がある。

また例えば、今の若い人たちは「賞味期限」を過ぎた食品を簡単に捨てる。ほんのしばらく前まではそんな表示はなかったのに、臭いを嗅いで、舌先で舐めたり少しだけ噛んだりして、食べて大丈夫かどうか自分で判断した。賞味期限表示に頼るということは、そのような感知機能をアウトソーシングさせることを通じて自分自身のそのような本能的というか動物的な嗅覚や味覚や触覚を限りなく劣化させていることになる。

●田んぼには裸足で入ろう

皆さんは昨日、田植えをして、たぶんここ自然王国の決まりで田植え足袋というものを履いて田に入ったと思うが、本来は裸足で入るのが正しい。

土は命の源である。土は、微生物の死骸の何億年に及ぶ堆積であり、そうであるが故に、生きた現役の微生物がそこで活動する豊かな生命圏でもある。皆さんが畑や田んぼの土を手で一握りすると、そこには約10億匹の微生物がいる。

私が裸足で田んぼに入ることをお勧めするのは、命の源である土の触覚を味わって貰いたいからである。しかも、足の裏は、漢方医学が教えているように、全身のあらゆる部位に繋がっている超敏感センサーである。

ところで、アランナ・コリー「あなたの体は9割が細菌」（河出書房新社）によると、その標題の通り、人間の体は、遺伝子レベルで言うと、ヒト自身が行っている機能は1割で、後は腸内フローラをはじめ様々な微生物が絶妙なるチームをなしに行っているのだという。

とすると、生命の源である土の微生物と、人の体の9割をなす微生物とが、足裏を通じて話し交流し、命の大切さを確認し合うということが、裸足で田んぼに入ることによって起きるのである。そのように触覚的に直感出来るようになれば、あなたの五感はだいぶ修復され、人間本来に少しは近づいたということである。

【受講生のレポートより】

■InformationとIntelligence

単なる情報を消化することと消化した情報を活用できる素材に作り上げていくことは格段の差がある。他方、活用できる素材にするためには質の良い情報ばかりを効果的に集めることが最短距離なのか、それとも幅広く色々な情報を集めていった結果、質の良い情報に対する嗅覚が備わってくるのか、鶏が先か卵が先かではないが、しっかりと必要な情報を収集できる能力を訓練して習得していくことが大切だと感じる。

「第六感（直感力）＝感覚で鋭く物事の本質を掴む心の動き」については、システムエンジニア業界でもトラブル対応等で重要視されることが多く、現場を多く経験しているエンジニアが多く持ち合わせていることが多い。

管理者になると、現場から離れてしまうことが多いが、いかなる点においても現場へ出向き、直感力を磨く方法・大切さを認識することができた。

視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚という五感を研ぎ澄まして、直観力を鍛えることが重要であるとのお話があったが、直観力とはこれまでの経験の積み重ねの中から、重要だと思える経験を瞬間的に組み合わせ、何らかの気づきとして出てくるものであり、この点について、データ力と

いう観点からは、AIも優れたものを持っているかと思う。他方、数あるデータの中から、どのデータが重要であるかという判断については、現在のAIの技術では難しいかもしれない。ただし、この点を克服することができれば、AIも直観力を兼ね備えることができるのではないかと思う。人とAIの関係については、今後、社会のあり方を考える上で、極めて大きな問題であると思う。

直感力は、AI技術に代替されない、人間に残された最後の力ではないか、という言葉に深く納得した。しかし、一方で、現代の都会人ではこの「直感力」の劣化が激しいことも伺った。この直感力・五感を鍛えるためには、「本物に直に触れる」ことが必要だと学んだ。現代社会では、わざわざ「本物」に触れなくても済んでしまうことが多い。世界の音楽をスマートフォンでダウンロードできるし、美術館に行かなくとも画像検索すれば名画を見ることができる。しかし、それはツールを介在した、いわば臨場感に欠ける触れ方である。「本物に直に触れる」ことを意識して、直感力を鍛えていきたい。

ある雑誌でトヨタ自動車の豊田社長が、「トヨタはこれまで『イミテーション』で成長してきた。これからは『イノベーション』で業界を変えていく」といった趣旨の発言をしていた。欧米の自動車技術を日本の仕様に合わせて云わば「模倣」し自動車業界において現在の地位を築いてきたが、これから従来の枠組みの延長のみではなく、業界の垣根を超えた技術・製品の「革新」が必要だという。

「直観力」のお話で本物に直に接しなければならぬとありましたが、食品の商品開発を行っている仕事上、漠然と感じていたことが言葉になって自分の腹にはまった感じがしました。体験したことがないことは、再現も表現も説明もできません。実体験に勝ることはないと考え、自ら本物に触れに行くことを大切にしていきたいです。

土を忘れた日本人：亡くなった父からも子どもにも土に触らせるべきと唱えていた人で、感覚論では理解していましたが、その事を論理的に説明頂き、腹落ちしました。

第1回で、駒井さんがお話されていた美しいものに感動するという事＝五感を使うという事につながるのではないかと感じます。人間としての成長する為には、本物を正しく受け止められる土台作りが大切なのではないかと思います。

Informationとintelligenceの違いを改めて理解でき、自分が本当はうわべの理解、言われたことを鵜呑みにしていることの情けなさを痛感。本物・本質を理解した上で自分がどう感じるのかは改めて日々実践したい。代用品は代用品でしかなく、本物ではない。

・論理力（頭）／想像力（こころ）／直感力（体全体）の三角構造について、普段論理力を使うことがほとんどであり、特に直感力は磨きをかけることができてない。

■インフォメーションとインテリジェンスの違い

さっそく週明けのチームミーティングでこの話を共有した。会社での意思決定のプロセスにおいて、私は発散と収束を大切にしており、まさにこのインフォメーションとインテリジェンスの考え方と同じように整理できるため、活用していきたい。

多くの示唆に富んだ話だったが、本物に触れよ、との指摘には、個人的にはやや違和感ももつ部分もあった。例えば音楽に関して、レコードやCDの音楽も、プロがこだわりをもって作った、ある意味本物であり、特に今の若い世代ではそれで感動する人も多くいると思う。いわゆるミレニアル世代という言葉もあるが、インターネットやSNSなどに幼い頃から慣れ親しん

できた若い世代だからこそ持っている感性や感覚もあるはず。自分としては、上の世代も下の世代も、意識的に幅広く交流を継続していきたいと感じた。

=====
この時代を生きる覚悟”を腹に決め、誰にも負けないインテリジェンスを磨いていってやろう。なんて高野氏の明治維新の話も相まってか、ちょっと志士の様な気持ちにもなりつつ、志士なら論理力・想像力・直観力に行動力もだろう！とか、大言壮語を並べて見たくなる、確実に一つ視野が広がった感覚を覚えた講義でした。
大言壮語を有言実行出来る様、精進致します。

=====
私は、幼少期から都会に住んでいたため、ビルなどが見えない今回のような田畑に囲まれた場所に2日間身を置くことは生涯初であった。その中で、日の出を見たり、田畑の写真をとったり、普段は絶対しないような行動を自然にとっていた。このような経験は、直感力と想像力を高めることに繋がると感じた。



大隈塾リーダーシップ・チャレンジレポート vol.02

2018年6月2日発行（通算43号）

大隈塾事務局（一般社団法人ストーンスープ）

村田信之 mura@ta2.so-net.ne.jp

169-0051 東京都新宿区西早稲田1-9-19 アーバンヒルズ早稲田207

tel:050-3558-7527

mail:ookuma_school@stonesoup.tokyo